



高い開発技術と自社一貫生産設備で国内産靴下にこだわる

吉谷靴下株式会社 奈良県磯城郡三宅町

吉谷靴下株式会社は、1952年創業の靴下メーカー。三宅町但馬にある同社工場では、「5S」と「業務の見える化」が徹底され、業務効率化が進んでいる。分業制が一般的な靴下製造業において、自社一貫生産設備を有し、顧客の短期要請に込えているのも同社の特長である。

コスト競争力を強化するため、海外に協力工場を持ちながらも、国内での高品質な靴下づくりにこだわりを見せる吉谷社長。今後も最新鋭機への設備投資を続けると同時に、熟練技術者に蓄積されたノウハウの継承・発展にも努め、高品質・高機能な日本の靴下づくりで勝ち残りを目指す。

会社概要

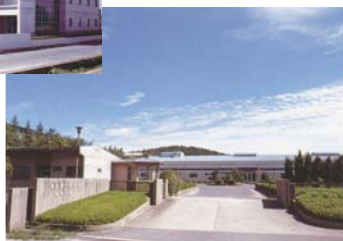


会社名：吉谷靴下株式会社
所在地：奈良県磯城郡三宅町但馬 94
電話：0745-57-1123
FAX：0745-57-1124
創業：1952（昭和27）年
設立：1965（昭和40）年
代表者：代表取締役社長 よしたに ひろいち 吉谷 浩一
資本金：1,000万円
従業員：172名
事業内容：紳士・婦人・子ども・ベビー用靴下の製造



1995年・1998年に新築移転した本社工場（上）

子ども・ベビー用靴下をメインに製造する名張工場（下）



1952年創業の靴下メーカー

吉谷靴下株式会社は、現社長・吉谷浩一氏（47歳）の父・吉谷康平氏が、1952年に三宅町但馬で創業した靴下メーカーである。

1970年には、三重県名張市に子ども・ベビー用靴下をメインに生産する工場を新築。1995年には本社社屋・工場を、1998年には本社編立工場・倉庫を三宅町内で新築移転し、業務効率化と増産を実現することで順調に業容を拡大してきた。

しかし、売上の多くを頼っていた主要取引先が経営危機に直面し、同社も深刻な影響を受ける中で、10年前に父・康平氏が病に倒れる。この荒波の中、37歳で社長職を継ぐこととなった吉谷社長は、当時を最も苦しかった時期と振り返る。

社外の指導者から5S・見える化を学ぶ

そんな同社に、2008年、大きな転機が訪れる。大手商社から指導者を招き、1年間にわたり全社を挙げて「5S（整理、整頓、清掃、清潔、躰）」や「業務の見える化」などの業務改善活動に徹底して取り組んだのである。

開始当初は、社員はもちろん、社長自身にも大きな戸惑いがあったというが、その効果は目に見えて現れ、社員の自主的な改善活動として定着し、現在まで続いている。機械の稼働状況や各工程での生産目標・実績などの「見える化」の進んだ同工場は、他メーカーから見学の依頼も多く、社員のやりがいの醸成にも繋がっている。

自社一貫生産の強みを生かす

分業制が一般的な靴下業界にあって、1961年という早い時期から一貫生産に取り組んできた同社は、企画・開発・サンプル品の製作から、編立・

縫製・検品・タグ付け・包装まで、ほぼ全ての工程を自社内で行える施設を有している。個々の工程だけを見れば、外注した方が低コストとなる場合もあるというが、短納期に対応できるほか、工場全体の流れが従業員間で共有でき、結果的に各工程のムダを省くことにもつながるのだという。

また5Sの行き届いた広い倉庫・工場内は、原糸の入荷から製品の出荷まで、スムーズに製品が流れるよう動線にも細かな工夫がなされている。



温湿度が一定に保たれた工場内に、編立機が並ぶ

優れたデザインを「編み機」で作る

「普通の靴下を普通に編むだけなら、編み機のポテンシャルを活かしたことになる」と語る吉谷社長は、高度かつ複雑に情報化の進んだ編み機で、どこまで出来るかを徹底的に追求する。

2013年に開催された「第19回靴下求評展」では、同社から3作品が入賞。多色の糸でステンドグラスの透明感を演出した靴下や、多層の編み地で立体的な模様を表現した靴下など、精緻なデザインが評価される一方で、片手の2本の指先で簡単に着脱できるよう設計された介護用の靴下は、ユニバーサルデザインの観点から優れているとされ、日本靴下工業組合連合会理事長賞を受賞した。しかも、介護用靴下のつま先に縫い付けられた留め具を除き、すべての作品が編み機のみで作られており、同社の優れた技術力を物語っている。



2013年の靴下求評展で入賞した3作品。デザイン靴下（左・中）と、片手の2本指で容易に着脱できる介護用靴下（右）

国内産の靴下にこだわる

戦後、奈良県の主力産業として成長を遂げてきた靴下製造業。しかし、国内のコスト高や円高の進展等を受け多くの企業は海外に生産拠点を移した。今や国内で流通する靴下のうち国産品は1割程度、全国の業者数はピーク時の2,000社から300社程度にまで激減した。同社においても、売上の半分以上はまだ国内の自社工場での生産が占めているとはいえ、中国・広東省の協力工場の製品が増えてきているのも事実である。

コスト競争力に勝る海外産の靴下に対し、国内の靴下製造業が生き残るための方策とは何か。これについて、吉谷社長は「可能な限り手間とコストのかかる縫製を避け、靴下編み機でできることの限界を追求する」とことと、「開発・技術力を高め、真に顧客ニーズに応えること」だと語る。

設備投資と人材育成で更なる高みを目指す

大手流通小売が発売し大ヒットした「足なり直角靴下」や「脱げにくいカバーソックス」の開発に携わり、技術面でも大いに貢献した同社が、次に掲げるテーマは「挑戦」。日本で数社しか所有していないという、つま先部分を自動縫製できるイタリア製の最新編み機を導入するなど、設備投資と並行して、熟練技術者に蓄積されたノウハウの継承・発展にも注力し、日本の靴下づくりに情熱を燃やしている。（太田宜志、橋本公秀）